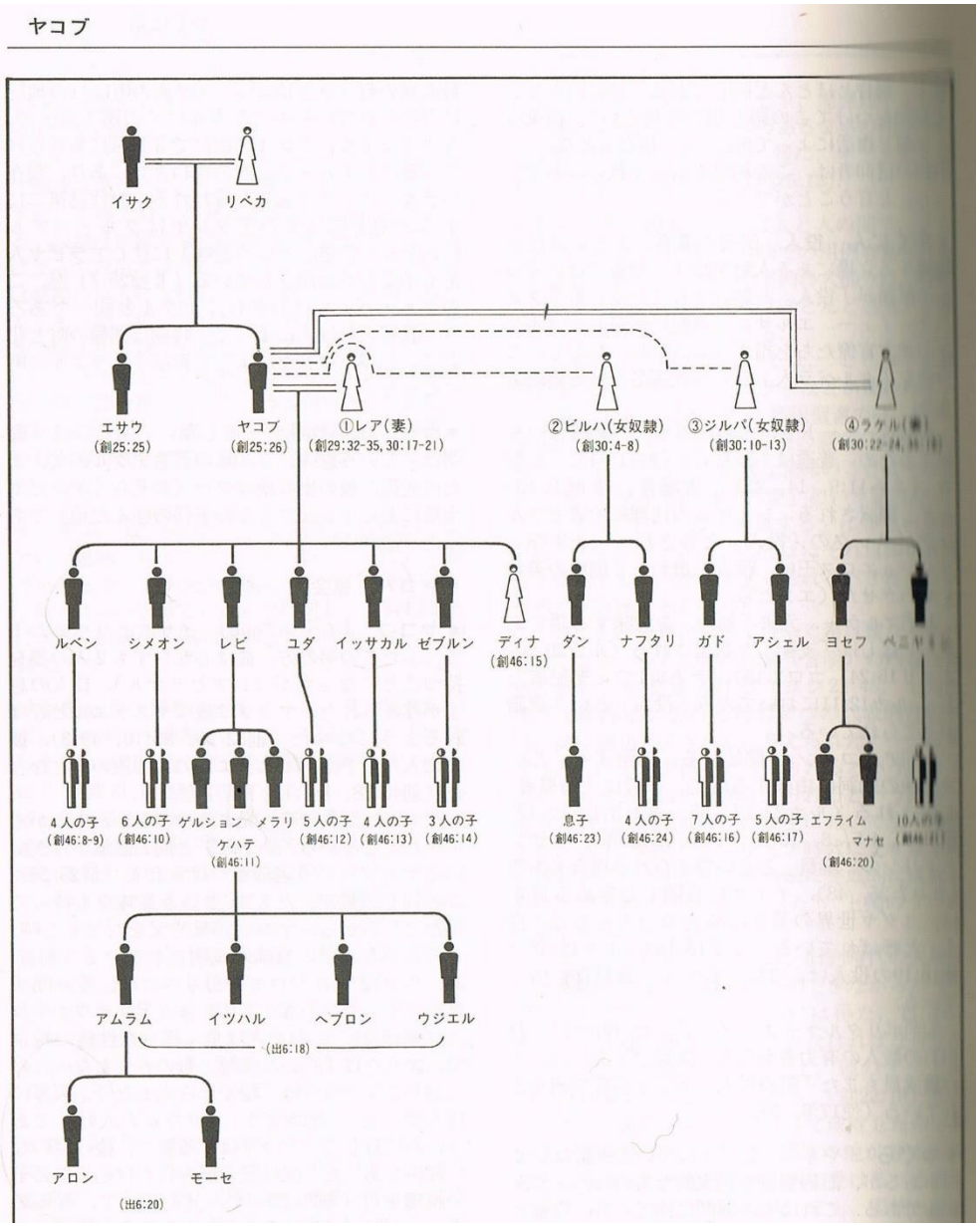

2021年3月7日　説教「救いを待ち望む」

創世記49章1～18節

147歳のヤコブはヨセフと息子達に祝福の言葉を与えました。

1．ルベン、シメオン、レビ（1～7節）

①イスラエルに聞け（1~2）**「ヤコブはその子らを呼び寄せて言った。『集まりなさい。私は終わりの日に、あなたがたに起こることを告げよう。ヤコブの子らよ。集まって聞け。あなたがたの父イスラエルに聞け』」**エジプトのラメセスの自宅に子供達を集めて、個々への遺言を語ります。終わりの日というのは終末のことではなく、これからの時代というほどの意味です。死の床でありますが、イスラエルは力をふりしぼって語ります。そこには権威が感ぜられます。

②ルベンに（3~4）**「ルベンよ。あなたはわが長子。わが力、わが力の初めの実。すぐれた威厳とすぐれた力のある者。だが、水のように奔放なので、もはや、あなたは他をしのぐことはない。あなたは父の床に上り、そのとき、あなたは汚したのだ。−彼は私の寝床に上った−」**長男のルベンの母はレア。「わが力、わが力の初めの実・・」と語られるほどに、彼は特別の存在でした。しかし、「水のように奔放」というように、抑制が足らなかったと伝えられます。そこで長男としての特権は失われたと告げられます。なんといっても、父のそばめビルハと寝た（35:22）ことは、彼にとっての失態でした。

③シメオンとレビ（5~7）**「シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の道具。わがたましいよ。彼らの仲間に加わるな。わが心よ。彼らのつどいに連なるな。彼らの怒りにまかせて人を殺し、ほしいままに牛の足の筋を切ったから。のろわれよ。彼らの激しい怒りと、彼らのはなはだしい憤りとは。私は彼らをヤコブの中で分け、イスラエルの中に散らそう。」**レビ族は後に祭司を生んでいくのですが、固有の領土は得られず、シメオンとともに、「暴虐の道具」「仲間に加わるな」などの厳しい言葉が伝えられました。その理由は彼らが「怒りにまかせて人を殺し」とあるように「怒り」と「憤り」が問題でした。彼らは34章にあるように妹ディナへの復讐のため暴虐行為をしたのです。

2．ユダへの祝福（8～12節）

①ユダ（8）**「ユダよ。兄弟たちはあなたをたたえ、あなたの手は敵のうなじの上にあり、あなたの父の子らはあなたを伏し拝む。」**ユダはヤコブとレアの間の四男。ユダには嫁のタマルとの重大問題がありました（38章）。しかし、父からエジプトに派遣された時のリーダーでした。ここには、兄弟たちによって信頼され、彼を伏し拝むほどになるとあります。また敵のうなじを抑えるほどの力を持つというのです。

②獅子の子（9~10）**「ユダは獅子の子。わが子よ。あなたは獲物によって成長する。雄獅子のように、また雌獅子のように。彼はうずくまり、**

身を伏せる。だれがこれを起こすことができようか。王権はユダを離れず、統治者の杖はその足の間を離れることはない。ついにはシロが来て、国々の民は彼に従う。」ユダの部族は獅子に例えられます。雄獅子、雌獅子のように活躍するのです。ユダの統治は力強いのです。ユダ族はその統治を確かなものとするのです。そして、ついにその子孫からはシロが来るのです。シロとはダビデ王、さらにはメシヤのこと、平和の君と理解できます。国々の民はシロに従うのです。

③ぶどうの木につなぎ（11~12）**「彼はそのろばをぶどうの木につなぎ、その雌ろばの子を、良いぶどうの木につなぐ。彼はその着物をぶどう酒で洗い、その衣をぶどうの血で洗う。その目はぶどう酒によって曇り、その歯は乳によって白い。」**シロは雄ろばや雌ろばの子をぶどうの木につなぐほどに安泰なのです。「着物をぶどう酒で洗い」「その衣をぶどうの血で洗う」はキリストの十字架の受難を連想させます。その姿では、目はぶどうのようで、その歯が乳の色よりも白いとあるほどに、輝いているというのです。

３．ゼブルン、イッサカル、ダン（13～18 節）

①ゼブルン（13）**「ゼブルンは海辺に住み、そこは船の着く岸辺。その背中はシドンにまで至る。」**ゼブルンはレアの子で十男。地図にあるように、ヨシュア時代にカナンが分割されて、ゼブルン族に与えられたのはガリラヤ湖の西側の内陸。地中海からは離れていました。船の着く場所はありませんでした。まして、海沿いの町シドンに至る海岸線の領土はありませんでした。ゼブルン族の中にアシェル領地に入っていた人々があり、その事が預言的に語られたのかもしれません。

②イッサカル（14）**「イッサカルはたくましいろばで、彼は、二つの鞍袋の間に伏す。彼は、休息がいかにも好ましく、その地が、いかにも麗しいのを見た。しかし、彼の肩は重荷を負ってたわみ、苦役を強いられる奴隷となった。」**イッサカルもヤコブとレアの子で九男。後に与えられた土地は、ガリラヤ湖の南、ゼブルンと隣り合わせていました。たくましいろばが鞍袋の間に伏すように、安心して休息する穏やかな地を得るということでしょうか。しかし、実際には苦役を強いられる奴隷となって重荷を負うものとなるというのです。

③ダン（15~18）**「ダンはおのれの民をさばくであろう。イスラエルのほかの部族のように。ダンは、道のかたわらの蛇。小道のほとりのまむしとなって、馬のかかとをかむ。それゆえ、乗る者はうしろに落ちる。主よ。私はあなたの救いを待ち望む。」**ダンはラケルに仕える女奴隷ビルハとヤコブとの間の子で第五男です。ダン族に与えられた土地はエフライムの土地の隣にあり、地中海にも面していました。「道のかたわらの蛇」とか「小道のほとりのまむし」というような表現から、部族としては小さいことが預言されています。そして 18 節の「私はあなたの救いを待ち望む」というのは、これまでの遺言を覚えつつ、ヤコブは一呼吸して祈っているのです。

《結論》

今朝の聖書箇所にはヤコブ（イスラエル）の 12 人の子どもたちへ遺言とも言える部分です。12 人のうちの 7 人へのヤコブの伝えた言葉です。これらは、28 節にあるように、「彼は彼らを祝福したとき、おのおのにふさわしい祝福を与えたのであった」とあるように、それぞれへの祝福の言葉なのです。しかし、その内容に立ち入ると、厳しい叱責や戒めと思える内容が浮かびあがってきます。長男ルベンのなしたビルハへの罪のこと、シメオンとレビがなした復讐とも思える暴虐行為などが伝えられています。それに、ここには出てきませんが、ユダにも問題行動がありました。それは何を意味しているのかといえば、実をいえば、ヤコブ（イスラエル）自身が生涯を終えるにあたって、子供達の問題点を指摘しつつ、そこに映し出された自らの罪を告白となっているのではないでしょうか。「義人はいないひとりもいない」「すべての人は罪を犯した」（ローマ 3:23）とありますが、子供達のこれからの歩みを覚えるにあたって、甘い言葉ではなく厳しく臨むことによって神の恵みと愛を学ばせようとしているのです。「もし私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」（Ｉヨハネ 1:9）とあります。聖書の言う「罪」は神の前に問われるものです。神に背く自己中心が罪なのです。神の前にありのままの自分を伝え、赦しを請う時に赦しの恵みに与ることができるのです。ヤコブは子供達に言葉を伝えつつ、自らの罪を主の前にさし出していたと思われます。

次にユダに与えられた特別の言葉についてです。ユダは獅子の子とされて、勇気ある姿が伝えられます。また、ぶどうの木につなぐ、などの麗しい約束の言葉が次々と伝えられます。しかし、ここはユダが立派であるというよりも、「シロが来る」という言葉に注目したいのです。、ユダの末裔に救い主イエス・キリストが来られることが暗示されているのです。ヤコブ自身はキリストのことはわかりませんでした。しかし、ユダの流れの中から、メシヤ（救い主）が、人々を救うためにやって来られることが伝えることによって、豊かな神の恵みの約束が伝えているのです。ヤコブ（イスラエル）の流れの中から、救いにつながる祝福があることが示されているのです。

ヤコブは残る 5 人のことを述べる前に、18 節に「私はあなたの救いを待ち望む」と祈っています。これは罪多き人生を歩んできたヤコブ、そしてその息子たちの一族が救われていくには、主に恵みで救っていただくしかないと、主の憐みを願っているのです。

どうでしょう。私たちも主の前に出たならば、誇れる人は一人もいません。弱い罪人たちです。そんな者たちができることは、主の憐みにすがって赦しをいただいていくことです。十字架の身代わりの主に

よる、真の救いと平安をいただいていこうではありませんか。